

# 日英関係史

小林 哲也

キーワード：日本、英国、交渉、歴史

- 1 はしがき
- 2 日英関係の初期
- 3 「大君使節団」、密航留学生
- 4 壮大な「岩倉使節団」
- 5 「お雇い外国人」
- 6 夏目漱石の不愉快な英国留学
- 7 憲法の制定、日英同盟
- 8 英国崇拜熱
- 9 むすび

## 1 はしがき

第2次世界大戦後、日本は日米安全保障条約の保護の下に、復興をなしとげ、世界に伍していく力をつけた。その間、米国から雪崩れこんできた文化を吸収し、アメリカニズムの申し子になった。一方、英国については、戦前と同様に戦後も徐々に、その伝統と生活に憧れを持ち、一部では、異常な崇拜熱となった。

英国文学を研究している私にとって、日本と英国との関係については以前から関心を持ち、その主題について研究する必要があると思ってきた。

本論は日英関係を歴史的に辿るものである。イギリス人ウィリアム・アダムズ（三浦按針）の来日以後の歴史になるが、それ以後は鎖国、幕末、開国といった明治維新の大きな波を通り抜けなければならなかった。

私の不勉強から、その意義をあまり認識していなかった「岩倉視察団」の

壮大な大事業と明治日本における意義に驚いた次第である。次に明治維新に大きな貢献を果たした多くの「お雇い外国人」について触れた。

また今やほとんどの日本人の脳裏から忘れ去られた日清、日露戦争について調べてみると、その当時日本は、鎌倉時代の「元寇の役」に匹敵する、まさに滅亡の危機にさらされていたことを知り、慄然とすると共に、先人の指導者の判断と勇氣に感謝している。その間、その存在すらも知らなかった日英同盟が、この日本の非常時に大いに力を発揮していたことを認識した。

戦後日本は米国に続いて、英国に対する崇拝と賞賛の念が高まったが、それが最近過度になり、それが逆に異常な日本批判につながっている現象があることについて懸念した。

## 2 日英関係の初期

日本人が初めてヨーロッパ人に接したのは、1543（天文12）年のことであった。この年、中国の寧波に向かうポルトガル船が、九州の種子島に漂着した。これを契機に、貿易の利をめざしたポルトガル船は、毎年九州の諸港を訪れるようになった。またこの時伝来した種子島銃は新鋭の武器としてたちまち各地で使用され、従来の騎兵中心の戦法や築城法に大きな変化を与え、日本統一の気運をうながした。

イスパニア（スペイン）人も、1584（天正12）年には肥前の平戸に来て、日本との貿易を始めた。南蛮人（スペイン、ポルトガル人）との貿易や往来を通じて、日本が受けた影響は大きい。

その間、キリスト教は、1549（天文18）年のイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが布教のために来日したが、87年の豊臣秀吉のバテレン追放令以来約300年にわたる弾圧が続いた。

イギリス人が日本に初めて来たのは、1600（慶長5）年4月19日である。オランダ船リーフデ号が九州の豊後海岸に漂着した。リーフデ号がオランダを発ってからすでに2年2ヶ月の歳月が経過していた。当初の乗組員110人のうち生存者は24名、かろうじて歩くことができたのは10人足らずで、その中

に1人のイギリス人ウィリアム・アダムズ（1564～1620）年がいた。アダムズは、イングランドに生まれた。幼少の時から造船大工に徒弟奉公し、のち海に乗り出して、スペインの無敵艦隊襲来の時にはフランシス・ドレイクのもとで一隻の船長として参加している。その後経済不況のため、イングランドを離れ、水先案内人としてオランダ船に乗りこんでいたのである。

この時、徳川家康は豊臣秀吉の強硬外交を改めて、貿易を奨励する外交方針をとっていた。九州に漂着してから1か月後、まさに関ヶ原の戦いの直前であった。アダムズは船長が病気のため、その代理として、大阪城で家康に会見を許された。家康は国際情勢にたいへん興味を示し、イギリスはどのような国か、どこの国と戦っているのか、信仰は何かなどと問い、また世界地図によってマゼラン海峡を越えてきた長い航海を知って驚嘆した。

リーフデ号の乗組員は帰国したが、アダムズとオランダ人ヤン・ヨーステンの二人は、1603（慶長8）年江戸に幕府を開いた家康の貿易顧問として仕えることになった。アダムズには日本橋の小田原町（按針町）に屋敷、相模の三浦郡逸見村（横須賀市）に知行地を与えられた。ここから三浦按針という日本名を名乗ることになる。つまり三浦郡に知行地を持つ水先案内人の意味である。

アダムズは貿易顧問としてだけでなく、ある意味では西と東を結ぶ文化使節の役割を果たした。家康の命令で伊豆の伊東で西洋式の帆船二隻を建造したり、砲術、測量などの科学知識の伝達にも努めている。しかし、なんといってもアダムズの功績は、ヨーロッパと日本との間に貿易を開く地固めを行ったことであった。このアダムズの努力により1613（慶長18）年イギリスとの間に初めて通商関係が結ばれることになった。こうした状況の中で1620年5月16日、アダムズは平戸で死去した。

アダムズが九州に漂着してから23年後に閉鎖されたイギリスの平戸商館の生命は、わずか10年にすぎなかった。平戸商館にとって致命的な打撃になったのは貿易が開始された3年後1616年に、イギリスに対して好意的であった家康が死去し、その直後から幕府の外交政策が急旋回をとげたからである。

かの鎖国令がだされるよりも先に、いったんは結ばれたイギリスと日本の絆はこうして断たれてしまった。日英間の絆が修復されるまでには、200年以上の歳月を必要としたのであった。

1641年幕府の鎖国体制が完成し、平戸にあったオランダ商館は長崎の出島に移転が命じられた。出島は鎖国体制の中で唯一ヨーロッパに対して開かれた窓となった。

この出島という窓を通して、鎖国時代の日本にわずかにヨーロッパの情報を伝えてきたのが、『和蘭風説書』であった。それは毎年長崎に入港するオランダ船のもたらす海外情報を、オランダ通詞が翻訳し幕府に提出した「海外情報の和訳文」である。そして、この『和蘭風説書』は1641（寛永18）年から、日蘭修好通商条約の結ばれた年である1858（安政5）年まで、まがりなりにもヨーロッパに関する情報を日本に伝達するという役割を果たしつづけた。これによってイギリスの情報もほぼ正確に伝えられた。

1808（文化5）年8月、イギリス軍艦フェートン号がオランダ船を偽って不法に長崎に入港し、いつものように旗あわせに出向いたオランダ商館員2名を捕らえて人質にしたうえ、ボートを降ろして港内で示威行為を行い、薪水、食料を要求し、武装兵士の威嚇のもとに、この要求を通して退去した事件が起こった。たまたまヨーロッパではナポレオン戦争の結果、オランダ本国がフランスに併合されたため、オランダの植民地はフランスの敵国であるイギリスの艦隊に侵略され、英・仏の抗争はついにアジアにも波及するにいたったのである。フェートン号が長崎を襲ったのも、オランダの植民地占領に従事していたイギリス艦隊の行動の一環であった。長崎奉行松平康英は三日間港内を外国軍艦に蹂躪された責任をとり、切腹した。

それまで蝦夷地におけるロシアの進出に警戒心を深めていた日本人の脳裏に、新たにイギリスという国の存在が、強く焼きつけられることになった。幕府は国防体制の再点検を迫られ、江戸湾の防衛に着手したが、それと並んで翌年2月、長崎出島のオランダ通詞たちに英語の学習を命じたのである。ここにこれまでの蘭学に代わって、英学の登場するきっかけが与えられるこ

とになった。

鎖国の扉を開いたのはアメリカであった。1853（嘉永6）年ペリー司令長官が軍艦4隻を率いて浦賀に来航し、開国を強く要求した結果、翌年日米和親条約を正式に結んで開国した。

1854年、スターリングの率いるイギリス東インド艦隊の4隻の軍艦が長崎に現れ、英仏艦隊の入港の許可を求めてきた。これはアメリカの日本への進出に刺激されたものであったことは事実であるが、より直接的には前年に勃発したクリミア戦争で、英仏の東インド艦隊がロシアの極東艦隊を追跡する途中に日本に寄港したのであった。ここで日英間に和親条約の仮協定が結ばれた。そして1858年エルギン卿の来日をまってイギリスは、ロシア、オランダ、フランスの諸国とともにアメリカにならって「修好通商条約」を結び、ここに正式の国交が樹立されたのである。

この正式の国交関係の樹立により、初代英国公使として、オルコックが着任した。その後パークスと続いたイギリス外交団は、1862（文久2）年の生麦事件にみられたような日本人の反発に対して、63年の薩英戦争、64年の四国艦隊下関砲撃事件などのような力による威圧的な政策をとった。さらに攘夷運動が、薩摩と長州を中心にして次第に開国、また対英接近の姿勢に転向するのをみて、討幕運動を支援する姿勢を固め、幕府支持の態度をとっていたフランスを牽制した。

### 3 「大君使節団」、密航留学生

最初の海外派遣使節は1860（万延元）年咸臨丸によるアメリカへの使節団であった。これは日米修好通商条約本書批准交換のためである。総勢77名の大人数であったが、艦長は勝海舟で、その中通詞として福沢諭吉がいたことは有名である。

翌1861（文久元）年幕府の遣欧使節（いわゆる「大君の使節」）の一行に、また福沢諭吉が加えられ、ヨーロッパ6ヶ国（フランス、イギリス、オランダ、プロイセン、ロシア、ポルトガル）への旅に出発する。まさに諭吉の活

動空間は、彼がその必要をみてとった「英語」を媒介にして、鎖国下の日本から開かれた世界へと拡大し、ついには彼は新生日本のオピニオン・リーダーとしての活躍をすることになる。

この使節の目的は（１）安政の条約に含まれていた両都（江戸、大阪）、両港（新潟、兵庫）を開くことの延期を条約の締結５ヶ国に要請する（２）西欧諸国の近代的な諸制度の調査を行って、西欧文明をわが国に摂取するための土台の整備をする（３）樺太における日露両国間の国境線を設定する、などであった。

イギリス軍艦オージー号に乗り込んで品川を出帆していった一行の旅程は次のようなものであった。

江戸→長崎→シンガポール→セイロン→アデン→スエズ→カイロ→アレキサンドリア→マルセイユ

ここで注目しなければならないのは、長崎を一步出た途端から、香港を始めとして、その寄港地のすべてが、イギリスの植民地であったことである。

「大君の使節」の幕府の遣欧使節の後を追うように、帰国した初代イギリス公使オールコックは、その著『大君の都』において、次のように述べている。

まず香港、ついでシンガポール、ペナン、ガル岬、アデン、マルタ、とつぎつぎに植民地によるごとに、わたしはこれらがそれぞれ地球をとりまく、イギリスの一連の植民地の鎖の環であることを指摘した<sup>1</sup>。

それは文字通り「大英帝国という連鎖の環」をたどる旅であった。まさにイギリスは、日本の目の前に迫ってきていたのである。

この見学先には、工業文明の先端をいく生産関係の施設と並んで、病院、聾啞学校など社会福祉施設にもかなり重点がおかれていることは、注目すべきであろう。まさにこうして選択された見学先にこそ、近代化の先頭を切って走っていた当時のイギリスの世界に誇る文明が凝縮され、展示されていたのであった。

幕府は安政条約の締結後に「蕃所調所」を設置したが、それは外交文書の

翻訳と洋学の研究を通じて、専任の外交官及び通訳官の養成という急務に応えようとしたものであった。「蕃所調所」は「大君の使節」が派遣された1861（文久元）年には一つ橋に移って、「洋書調所」と改称され、さらに翌年には「開成所」と改名された。この「蕃所調所」の教官に英学担当者が誕生した。英書の復刻出版も行われた。その後も堀達之助、西周などによって英語の辞書、文法書が次々と刊行されている。かくして「英学」が盛んになり、これまで独占的な地位を誇っていた「蘭学」は崩壊の過程を辿っていった。

「大君の使節」の翌年には、チョンマゲをつけた日本の留学生の姿がロンドンに見られるようになった。1858年に「修好通商条約」が結ばれたからといって、ただちに日本の在外公館の設置や日本人の海外渡航が始まったわけではなかった。開国後も日本人の海外渡航は禁止されており、ロンドンに姿を現した留学生は海外渡航の禁令を犯して、密出国してきた留学生であり、しかも彼等を送り出したのは、幕府に対抗する姿勢を固めていた雄藩二つ、即ち他ならぬ長州と薩摩であった。

かねてから対外姿勢の面で積極的であった長州藩では、攘夷のためには海軍力を強化する必要があるとの認識に立ち、志道聞多（井上馨）がイギリスに留学生を送る具体的なプランを作成し、藩当局はこれを黙認するという態度をとった。この志道の計画を知った山尾庸三、野村弥吉の二人が同行を申し出、さらに伊藤俊輔（博文）、遠藤謹助が加わって合計5人の留学生がイギリスに派遣されることになった。

彼等がこの留学において最初に意図したのは、あくまでも「攘夷」を徹底するために主要敵国イギリスへの潜入を企て、その最新の軍備の秘密に迫ることにあつた。ところが百三十日に及ぶ船旅と、イギリスでの体験は、彼等にむしろ逆に教訓を与えることになり、開国という彼等の新しい人生が始まる契機になったのである。

しかし彼等の出国後、長州藩では攘夷の強硬論が大勢を制するようになりそれに対する報復行為として、1864（元治元）年、米英仏蘭四国連合艦隊による下関襲撃事件が起きた。ロンドンでこの事件を知った井上馨と伊藤博文

の二人は計画を放棄して、ただちに帰国の途についた。

薩摩藩の留学生派遣計画の立案者は、五代友厚、松木弘安（寺島宗則）の二人である。薩摩藩自体も1863年の薩英戦争の惨めな敗戦によって、イギリスの圧倒的な軍勢力に対する脅威を実感していた。そこで大勢は開国に向かわざるをえないのを見越して、薩摩藩ひいては日本の近代化に貢献できるような人材を養成するためにイギリスへ留学生を送ろうというのが、五代の書いた建白書の趣旨であった。藩当局も藩の実権を握っていた島津久光を筆頭にしてこの献策を積極的に採用することにして、藩の幹部候補生と藩の洋学教育機関であった開成所の学生から17名の逸材を選んで、留学生団を編成した。

幕府も1866（慶応2）年、海外渡航の自由化に踏み切らざるをえなくなるが、前年イギリスへ留学生を送ることを決め、イギリス公使パークスに依頼状をだし、イギリス政府からの承諾を得ることができた。選ばれた留学生の平均年齢が18歳足らずと若かったため、一行のいわばお目付役として歩兵頭・川路太郎、そして幕府御儒者として名をなしていた中村敬宇を取締として加えることにし、一行14名がイギリスに送られることになった。

このようにして、長州、薩摩、幕府の留学生の三者とも、一時期、ロンドン大学で学ぶことになった。

送られてきた母体は違うとはいえ、これら三者の留学生団が派遣された直接の目的は、イギリスの先進的な軍事技術を学び、導入して、自分達を送り出してくれた幕府なり藩なりの武力の強化に役立てることにあった。しかし学ぼうちに彼等の意識も日本というナショナリズムの芽生えと共に変化していった。いかにしてイギリスに追いつくか、またそのためにはどうしたら国を富ませることができるのか。日本の開化と富強に貢献するためには、ただ単に先端の技術を追いかけるだけでは不十分で、根本に戻ってヨーロッパ文化を基礎から、またそれを育んだ人間の問題に立ち、文明開化を理解するようにしなければならないと考えるようになったのである。



## 4 壮大な「岩倉使節団」

鳥羽・伏見の戦いが起こると、新政府はいちはやく王政復古を列国に通告し、1868（明治1）年3月には、五箇条の御誓文を公布して新政の基本精神を明らかにし、明治維新が行われた。

1871（明治4）年12月、総勢100人を越す大使節団を乗せた蒸気船アメリカ号が、横浜港を出港した。これが「岩倉使節団」である。日本人の最初の公式訪問であった「大君の使節」からわずか10年の歳月しか経過していないことを考えると、この使節団の重要性は理解できる。

一行は米欧州12ヶ国を歴訪し、明治6年9月に帰国した。1年10ヶ月にわたる大視察旅行である。期間ばかりではない。顔ぶれは主なところで、大使に岩倉具視、副使に大久保利通、木戸孝允、伊藤博文の明治新政府の重要閣僚がなり、そうそうたるメンバーである。国の内外に難問が山積するこの時期に、内閣の大半が二年近くも国を空け、世界を巡るのである。まさに空前絶後の出来事であった。使節団メンバーは46名（他に随行員15名）他に留学生42名も同行し、その中には、団琢磨、中江兆民などその後の日本の近代化に欠かせない人物もいた。また後年、津田塾を創設して女子教育に先鞭をつけた津田梅子ら5人の女子留学生在がいたことは特筆に値する。

この使節団の派遣を勧めたのは、以前は長崎や佐賀藩で大隈重信らを教えて、当時は開成学校（現在の東大）の教師をしていたアメリカ人宣教師フルベッキであった。彼は新政府の最高顧問として、わが国の内政の整備・近代化を図るには、何よりも欧米先進国の制度や文物の視察が必要であると力説していた。

フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」の指示に従って、具体的に視察目標を決めていた。つまり、国家制度をはじめ、財政、経済、教育、社会施設、軍備に及ぶ広範囲なものであった。

岩倉使節団の目的は三つであった。

（1）条約締結国への儀礼的訪問。（2）「不平等条約」改正の予備交渉のた

め。幕末に日本が結んだ条約では、外国人には治外法権が認められ、日本には関税自主権が認められていないという不公平なものであった。(3) 欧米の先進国の制度・文物を親しく調査・視察し、日本の近代化に役立てること、である。

一行は1871(明治4)年12月に横浜を発ち、太平洋を横断し翌年1月にサンフランシスコに上陸した。アメリカ滞在を皮切りに、ボストンから大西洋を渡り、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスを回った。1873年7月にヨーロッパを後にし、スエズ運河を経由して、南回りのセイロン、シンガポール、香港、上海を経て、9月13日に横浜に帰港した。

この大旅行の記録は5年後『米欧回覧実記』として刊行されるが、アメリカ、英国の両国で全体の五分の二を占めており、使節団が米英の視察を重視していた姿勢がうかがえる。この『米欧回覧実記』の執筆・編集にあたったのは佐賀出身の漢学者久米邦武である。最初から公開する目的で書かれたものであり、まさに欧米諸国についての周到な「百科全書」的な性格を持っていた。またこのことを可能にするほど久米の能力は優れていた。

原文は非常に多くの漢字を駆使しており、仮名はすべて片仮名を用い、濁音には濁点を打っていないものが多く、極めて読みにくい。内容は実に多岐にわたり精緻を極めているが、まず英国という国について次のように述べている。

英吉利国ハ……中に三部ヲ分ツ、南を英倫ト云、西南ヲ威爾スト云、北ヲ蘇格蘭ト云、三部共ニ人種ミナ異ニ、言語風俗モ各殊ナリ……英吉利ト云ハ、南方一部ノ名ニテ、全国ノ称ニハアラス……<sup>2</sup>

この当時の英国という国の成り立ちについて、すでに正しく認識している。また日本とはほぼ同じ面積のこの小さい島国英国が、なぜこの時点でこのように隔絶した繁栄を獲得したかについて、次のように書いている。

英国ハ商業国ナリ、国民ノ精神ハ、挙テ之ヲ世界ノ貿易ニ鍾ム。故ニ船舶

ヲ五太洋ニ航通シ、各地ノ天産物ヲ買入レテ、自国ニ輸送シ、鉄炭カヲ借り、之ヲ工産物トナシテ、再ビ各国ニ輸出シ売与フ……<sup>3</sup>

『米欧回覧実記』の第二編「英吉利国ノ部」の最後の部分で、次のように述べているのは興味深い。

……此等ノ事情、尽ク我日本ト反対ス、此国ノ幅員、人口、位地ノ、我日本ニ似タリトテ、其當生図利ノ目的ヲ学ハント欲スルモ、未タ得ヘカラス、故ニ英国ニ觀察シテ、感触ヲ我ニ与フル所、亦甚タ親切ナラス、只倫敦ハ世界天産物ノ大市場ナルヲ以テ、農利天産ニ富ム国ニ於テハ、其貿易ノ景況ニ深く注意スヘキハ、方今緊要ノ一ナルヘシ、内部ノ政治、国民ノ景況ニ於テハ、未タ我ニ緊要ナル所ヲミス、……<sup>4</sup>

要するに、いろいろ視察し、勉強をしてきて、大いに取り入れるべきものはたくさんあるが、必ずしも全て盲目的にとりいれるべきではない。国土の大きさ、人口等は似ているが、必ずしも模範とすべきではないと言っているのである。彼等が視察した英国は、その歴史における最盛期を誇ったヴィクトリア時代のイギリスであった。4ヶ月にわたる滞在の見聞は、逆に彼我の間に存在するギャップの大きさを実感させることになった。

「岩倉使節団」の視察の結論は「国を富ます基は、産業と貿易である」ということであった。とりわけ国際貿易が、交通・通信機関の飛躍的発達によって革命的に増大し、膨大な利益を生むことになったという事実を認識したのである。いずれにしても、この大使節団の明治維新における意義は極めて大きく、これを実行に移した明治人の大きさ、実行力には敬服させられる。

## 5 「お雇い外国人」

成立したばかりの明治新政府が掲げた二大目標は、富国強兵の達成と条約改正であった。前者の富国強兵のためには、資本主義の経済制度の確立、先進的な産業技術の導入、洋式軍制の移植が必要であり、後者のためには何よりも西洋の法制を導入することが不可欠であった。この課題を達成するためにはその推進役・担い手になるエリートを急いで養成しなければならない。

このようなはっきりとした目標指向性をもって、近代化という課題に立ち向かった。

その目標を達成する方法として採用されたのが、(1)留学生の組織的派遣、(2)外国人専門家の招聘のふたつであった。この(2)の外国人専門家がいわゆる「お雇い外国人」である。「お雇い外国人」というのは、明治初期の文明開化時代を中心にして、中央、地方の政府、学校などに、主として欧米諸国から雇用された外国人の総称である。彼等の役割・活動範囲などはさまざまであったが、大別すると次のようになる。

- (1) 顧問役——政府の諮問に答えたり、みずから建議をするもの。
- (2) 直接の援助役——とりわけ急を要する法律制度の整備において、未整備の我が国の現状に応じて、諸外国との調整役として働くことが多かった。
- (3) 教師役——諸官庁、学校、軍隊などで日本人の学生・生徒を教えるだけでなく、教官ないしは教官候補者として選ばれたエリートに、近代的な科学技術を教授する役。しかし彼等はそれにとどまらず、みずから直接事業を推進する役割を果たした人も多かった。あとで鉄道、海軍の建設に彼等が演じた貢献をみることになるが、活動範囲も立法、行政、外交、司法、軍事、警察、教育、交通、通信、産業、金融、建築、土木、開拓などおよそ近代的な国家体制として必要と考えられる範囲を、ほぼ網羅していた。

明治政府が雇用した「お雇い外国人」は、明治7年が最も多く、約500人に達していた。13年頃には半数近くになり、その後も減り続けたが、総数は3,000人に達したとみられている。「お雇い外国人」の時代は、明治3年から18年ごろまでであった。

これら「お雇い外国人」には、日本人職員とは桁外れの高い給料が払われ、いたれりつくせりの優待がなされた。

たとえば創立当時の東京大学の教授総数39人のうち27人が外国人で、日本人は12人しかいない。大学の施設・職制・講座が格段に充実した明治14年で

も、教授総数49人のうち外国人が26人である。そして創立当時は外国人教師の給料が大学の予算の三分の一以上を占めた。

国籍からいえば当時のわが国の対外関係で重要な地位を占めていたイギリス、フランス、アメリカの3か国の人々が絶対多数を占めていた。また彼等を最も多数雇用したのは、明治7年の調査で、鉄道・通信などの官営事業を担当した工部省228名、次が文部省77名、海軍省66名と続いた。工部省のお雇い外国人の総数は580人にも達しており、そのうちイギリス人の技術者はじつに総数の80%を占めている。まさに「世界の工場」としてのイギリスにたいする評価は、「岩倉使節団」の現地における詳細な調査もあって、「お雇い外国人」中におけるイギリス人の圧倒的な優勢をもたらしたのであった。

彼等の来日した理由はおよそ次のものが考えられる。まず彼等は多かれ少なかれ、日本に対して積極的な関心を持っていた。それはそれまでに外国に伝えられていた幻想的な憧れにとどまらず、文化水準が高く、鉱物資源にも恵まれた国としてのイメージがかなり際だっていた。またかつての「攘夷」への固執がすっかり消え失せて、外国人に極めて友好的であることが知られるようになり、しかも厚遇ぶりも伝えられていたからである。しかし中には本国での生活の挫折から日本にきた者もいて、「ヨーロッパの掃きだめ」の感もあった。イギリスの青年外交官アーネスト・サトウはその回想録で次のように述べている。

少し酷な表現だが、イギリスの某外交官が当時の横浜在住の外国人社会を、「ヨーロッパの掃き溜め」と称した。本国の、口うるさい世間の束縛から解放されて、誘惑の多い東洋の生活へ突然入ったため、神学校の学生のような品行の厳正を保って行動せぬ人間が多少見受けられたのは当然だ。しかしそれらの人々が、他所にいる同階級の人々たちより特別に質が悪いとは思えなかった<sup>5</sup>。

これら「お雇い外国人」の多くが、進歩した西洋の「文明」を東洋に伝えるという使命感を持っていた。特に当時「世界の工場」としての地位を自負していたイギリス人はとりわけ強かった。

「民部大蔵省鉄道掛屋建築師長」という役名を与えられて来日し、日本の「鉄道の父」とよばれるようになったのは、イギリス人エドモンド・モレル（1841-71）年であった。ロンドン大学で学業を終えた彼は、ニュージーランド、オーストラリアで土木技師、鉄道技師として働き、さらに1870年にセイロンで鉄道を完成した直後に来日した。

給与は初年度で月額700円、太政大臣につぐ破格の待遇であった。モレルは着任早々新橋・横浜間の鉄道工事を始めた。しかしモレルはこの時既に肺結核に感染しており、作業の進行と共に病状が悪化し、1871年9月に死去してしまった。新橋・横浜間の鉄道が開通するのは、モレルが死んだ翌年であり、東海道線が全通したのは17年後の1889年である。

もう一人著名な「お雇い外国人」としては「イギリス海軍派遣教師団長」として来日し、日本海軍の基礎を固めたアーチボルド・L・ダグラス（1842～1913）年がいる。「世界に冠たる王室海軍の伝統を抛り所とする自信にあふれたイギリス公使パークスの強力な売りこみがあり」、海軍伝習の主役をオランダからイギリスに切り替えることに成功したのである。明治新政権のもとで設置された「海軍兵学寮」では、まず指導者を養成するように士官教育を目指した。

この士官教育が軌道に乗るようになったのは、明治7（1874）年からであり、それには前年来日したイギリスの教官団（ダグラス・ミッション）によるところが大きかった。この教官団は、日本政府の要請によってイギリス海軍が正式に派遣してきたものであって、団長のダグラス中佐以下、砲術、航海、機関、造船の各科士官が5人、下士官12人、水兵16人の総計34人からなるものであった<sup>6</sup>。

彼は日本に来て、ほとんど全権を委ねられて、エリート教育の徹底と実地教育の重視という二つの基本方針のもとで、兵学寮の教育の全面的な改革に取り組んだ。

全体的に言えば、「お雇い外国人」の歴史的役割は、日本の近代化のための助言者ないしは脇役にとどまっていた。政府は彼等をあくまでも知識・技術

の提供者として雇用したのであって、政治的に外国人に指導されていたのではなく、政策を決定する主導権は、日本の指導者がしっかりと握っていたのである。

## 6 夏目漱石の不愉快な英国留学

岩倉使節団がイギリスを訪問して 20 余年後の 1900（明治 33）年 6 月、熊本第五高等学校教授夏目金之助は、「英国研究の爲め満 2 年間英国へ留学を命ず」という命令を受けた。これまでの国費留学生とは医学、工学といった実用分野のものが多かったが、派遣対象が拡大され、日本人の語学教師の質的な向上を図ることが急務であるということになり、この年初めて文部省は、英語とドイツ語の語学教師を留学生として派遣することにした。漱石以外で英語の留学生は、後の日本の英語教育において大きな足跡を残すことになる外国語学校教授の神田乃武であった。

漱石は自分の留学目的が「英文学」の研究ではなく「英語授業法ノ取調」であったことに、最初は異常なほどのこだわりをみせた。日本の近代化は物質主義の傾向を持ち、「英文学」ではなく、「英語学」で、「英語学」は欧米に追いつくために不可欠で有用な技術であった。しかし漱石の心は、そうした語学でなく、文学のほうに向いていた。日本の近代化の中で、社会における文学者としての有用な存在として、近代化の一翼を担いつつ、自らの内面の声に従うことが、漱石の生涯を通じての願いであった。

漱石の「文学論」（1907 年）の序には、そのこだわりについて、次のように書いている。

予の命令せられたる研究の題目は英語にして英文学にあらず。余は此点に就て其範囲及び細目を知るの必要ありしを以て時の専門学務局長上田万年氏を文部省に訪ふて委細を質したり。上田氏の答へには、別段窮屈なる束縛を置くの必要を認めず、只帰朝後高等学校もしくは大学にて教授すべき科目を専修せられたき希望なりとありたり。是に於て命令せられたる題目に英語とあるは多少自家の意見にて変更し得るの余地あるを認め得たり<sup>7</sup>。

結局、漱石は自らも納得させ、文学の有用性の問題も解決せざるをえないと覚悟して、英国に向かったのである。

漱石の英国滞在について調べて見ると二つのことが顕著になってくる。一つは自分の本来の目的である「英文学研究」であり、一つはそれに伴う「下宿の選定」である。最初は最高の学府として知られるケンブリッジ大学に留学するつもりで、紹介状を持って行ったが、経済的事情で断念し、次にエディンバラ大学を考えたが、英語の発音が違うという理由でこれも断念した。結局ロンドン大学に決め、通学したり、個人教授も受けたりしたが、それも一年ほどしか続かず、以後は「下宿簞城主義」を決めこんで、読書三昧の生活を送ったのであった。

下宿の選定については、ロンドン滞在中のわずか二年数ヶ月の間に、五度も下宿を変えている。第一の下宿は大学に近い所であったが二週間、第二の下宿は、漱石のロンドンにおける下宿の中で最も環境と設備に恵まれていたが、六週間ほど滞在したにすぎない。第三のものは下宿代は以前のものに比べて、かなり安い。しかしその分、地理的条件ははるかに悪くなっている。この第三の下宿のブレット家が経済的に困窮し、差し押さえにあったため移転することになったのに、漱石は一緒について行くことになる。それが第四である。結局それも意に添わず、「当方、日本のジェントルマン、賄いつきの住居を求む。文学に多少の趣味を有する、イングランド人の家庭に限る……」の広告をだし、やっと落ち着くことができたのが、第五の下宿であった。下宿の主人ミス・ルールはかなり教養があり、その点ではこれまでの下宿の主人達とは大分違っていた。彼は初めてイングランドの中流階級の良さに触れ、その結果帰国までの約1年半ほどを、この下宿の自室に閉じこもって、彼独特の研究生生活を送ったのであった。

漱石がロンドンで暮らした二年数ヶ月は、イギリスがその繁栄の頂点を過ぎて、列強との間の熾烈な帝国主義争覇戦争に巻き込まれていた。ロンドンに到着してすぐに、ブーア戦争からの帰還兵の行進やヴィクトリア女王のご大葬を見ることは、まさに時代の大きな転換期に彼が一人の目撃者として



立ち会っていたことを示している。

二年数ヶ月のイギリス滞在を終えた後の漱石のイギリス観は、決して好意的なものでもなければ、肯定的であったわけでもない。彼は留學生活の後半にはみずからいうところの「下宿竈城主義」を決め込んで、将来予想される大学における講義にそなえたノートづくりにいそしんだが、それをもとにした「文学論」（1907 年）の序には、当時の漱石のイギリスについての感情が赤裸々に語られている。

「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快な二年なり。余は英国紳士の間にあって、狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あわれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百萬と聞く……余が乞食の如き有様にてエストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲しつつある此大都會の空氣の何千立方尺かを二年間に吐吞したるは、英国紳士の為めに大いに氣の毒なる心地なり。謹んで紳士の模範を以て目せらるる英国人に告ぐ。余は物數奇なる酔興にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志よりもより大なる意志に支配せられて、氣の毒ながら此歳月を君等の麵麴の恩沢に浴して累々と送りたるのみ。二年の後期満ちて去るは、春來って雁北に帰るが如し。滞在の當時君等を手本として万事君等の意の如くする能はざりしのみならず、今日に至る迄君等が東洋の豎子〔小僧、青二才〕に予期したる程の模範的人物となる能はざるを悲しむ。去れど官命なるが故に行きたる者は、自己の意思を以て行きたるにあらず。自己の意志を以てすれば、余は生涯英國の地に一步も吾足を踏み入る事なかるべし<sup>8</sup>。

「尤も不愉快な二年なり」は、漱石の痛切な心の叫びであるが、彼自身の性格、英文学に対する葛藤もあろうが、何よりも英国と日本の間に横たわる「文明の時差」について意識したからであろう。その間漱石自身が神経衰弱にかかっているとの噂もたった。

イギリスに対する醒めた眼を育てた留學体験も、歳月が経過するにつれて少し変化し、胃潰瘍で倒れた年に学習院で行われた講演「私の個人主義」において次のように述べている。

話が少し横へありますが、御存じの通り英吉利といふ国は大変自由を尊ぶ国であります。それ程自由を愛する国でありながら、又英吉利ほど秩序の調

った国はありません。実をいふと、私は英吉利を好かないのです。嫌ひではあるが事実だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でさうしてあれほど秩序の行き届いた国は、恐らく世界中にないでせう……私は貴方がたが自由にあらん事を切望するものであります。同時に貴方がたが義務というものを納得せられんことを願ってやまないものであります。斯ういふ意味において、私は個人主義だと公言してはばからない積もりです<sup>9</sup>。

漱石は「私は英吉利を好かないのです」といいながら、むしろイギリス人の間に見られる「自由と義務」の両立を賞賛して「個人主義」の確立の必要を説いたのであった。

漱石にとってイギリスは、明治維新のサムライを含む多くの留学生と違って、無条件に学ぶべき「模範」ではなかった。「文明の時差」と共に、繁栄のピークから落ちていく大英帝国の衰退と、産業革命後の人間が機械によって支配されていく資本主義社会の行方を憂慮していた。

## 7 憲法の制定、日英同盟

幕末・開国期以来のイギリスに対する日本人の「問いかけ」の一つは、イギリスの世界制覇、その原動力をなした強大な経済力が達成された秘密を探ろうとするものであった。それ以外にもうひとつ、イギリスに向かって問いかける課題が、わが先人たちには存在していた。それはイギリス独自の国制とりわけその中心に位置していた議会政治に対する問いかけである。

日本の鎖国をそのまま担ってきた「大君の使節団」にとっては、イギリスの国制と議会政治は彼等の理解のレベルをはるかに越えた存在であった。

自由民権運動は、単に国会の開設や憲法の制定を政府に要求しただけでなく、国民自身による新しい国家像の追求という側面をもっていた。というのもまだ明治十年代の日本には憲法も国会も存在せず、政府ばかりか国民・民衆も、日本の未来像を自由に構築することのできる可能性を持っていたからである。

そのことを端的に表現していたのが、「私擬憲法案」である。現在 40 種ほどの「私擬憲法案」の存在が確認されているが、福沢諭吉の慶応義塾の出身

者を中心にして、1880（明治 13）年に結成された社交クラブ「交詢社」が、翌 14 年 4 月 25 日発行の『交詢雑誌』第 45 号に発表した、「交詢社憲法案」がそれである。この憲法案は明らかに議会ならびに議員内閣制を中心に据えたイギリス型の立憲君主制を基調にしている。

それでは日本にイギリス型の国制を導入する可能性は、どうなったのだろうか。すでに問題が顕在化しそうになっていた 1881（明治 14）年 7 月、井上馨は盟友伊藤博文に手紙を書いて、プロイセン型の憲法を採用することへの決断を迫っていた。

その手紙によれば、大隈がイギリス型の憲法案を持ち出してくるかもしれない、しかしイギリスの政体は「コンスティテューショナルマナキー」（立憲君主制）ではあるけれど、その憲法は成文化されておらず。多分に慣習法によるところが大きい、それはイギリスのみに適するものであって、移植することは不可能である、福沢たち英学者には、それがわかっていないのである。だから早くドイツ法を習って、わが憲法を定める機会を逃すべきではない、というのであった。

政府が意図したのは欽定憲法の制定であった。1882（明治 15）年、伊藤博文はヨーロッパにおもむいて、オーストラリア人シュタイン、ドイツ人グナイストらの著名な公法学者から主としてドイツ風の憲法理論を学び、翌年帰国するとさっそく立憲政治開始の準備にとりかかった。1884（明治 17）年には華族令を定めて華族制度を整え、将来上院を設ける土台とし、翌年には太政官制を廃して、内閣制度を創設した。このとき宮中を政治から離すために宮内省を内閣の外におき、長州出身の伊藤が初代の内閣総理大臣となり、政治はまったく薩長藩閥の手に帰した。また地方制度にも大きな改正をくわえ、1888（明治 21）年には市制・町村制、1890（明治 23）年には府県制・郡制を定めてドイツ風の地方自治制を確立し、政府の基礎をかためた。

憲法の起草は 1886（明治 19）年ごろから始まった。草案は民権派の反対を防ぐために、厳重に秘密が守られ、伊藤を中心に井上毅・伊東巳代治・金子堅太郎らが、政府顧問のドイツの法学者ロエスエルらの指導のもとに起草に

あたった。草案がなると、1888（明治21）年天皇の諮問機関として新設された枢密院で天皇臨席のもとにこれを審議したうえ、翌1889（明治22）年2月11日大日本帝国憲法（明治憲法）として発布された。帝国憲法の制定によって、日本はアジアで最初の近代的立憲国家となった。結局、憲法については日本は完全にドイツの影響を受けたことになった。

日英同盟締結に至るまでの経緯を考えると、伏線として朝鮮独立に関係した日清戦争があった。日本としては、自国の安全保障のために、朝鮮に大国の清国、ロシアが進出してくることを絶対に阻止しなければならないのであった。幸いに日清戦争で勝利して、明治28年4月17日の講和条約の調印では、（1）朝鮮の独立承認（2）遼東半島、台湾島の割譲（3）軍事賠償金二億両の支払、の三点が決まった。しかし、それに対してロシア、フランス、ドイツがいわゆる三国干渉を行った。調印から一週間も経っていない4月23日に日本に対して「遼東半島を清に返還せよ」というものであった。その当時日本はその三国干渉を受け入れざるを得なかった。日本はこの三ヶ国と戦争をしてもとうてい勝ち目はなかったからである。

その間イギリスを含めた列強は清国からあちこちの都市、湾を租借し、いわゆるシナの「生体解剖」が始まったのである。

大韓帝国が成立し、清国、韓国と日本との関係も好転するかと思われた。しかし、次はロシアの朝鮮半島への侵入である。いろいろな事件を契機にして、韓国はわずか数年のうちにロシアの保護領同然になってしまった。韓国皇帝がロシア公使館内で暮らすようになったり、北朝鮮の鉱山採掘権を取得したりしたのである。さらにロシアは朝鮮半島南部を虎視眈々と狙っていたのである。もし巨大海軍を誇るロシアが朝鮮南部に拠点を得れば、元寇が再び繰り返されるという懸念が起こり、日本国内では「ロシア討つべし」という世論が広まったが、日本政府は最初は彼我の力の差を認め、戦争を避けようとしていた。

しかし、日本にとって思わぬ味方が現れた。それは大英帝国であった。1902（明治35）年に日英同盟が結ばれたことが、日本を開戦に踏み切らせた。か

の大英帝国がロシアに対して圧力をかけ続けてくれれば、ロシア軍の動きは太に妨げられる。ロシアと同盟関係にある国も、イギリスとの関係上、ロシアを軍事的に助けることはないだろう。また、イギリスはロシアに対するいっさいの便宜供与を拒絶するだろう。そうなれば小国・日本がロシアに勝つチャンスが生まれるはずである、ということになった。

日本にとって、この同盟の持つ意味はまことに大きかったわけだが、英国が日本と同盟を結んだというニュースを聞いて、当時の国際社会は文字通り驚愕した。なぜなら世界に冠たる海軍を誇る大英帝国が、有色人種の小国・日本と同盟を結ぶというのは、常識では考えられないことであったからだ。そもそも当時の大英帝国は光栄ある孤立を誇りにして、ヨーロッパにおいてすら他国と同盟を結ばなかった。イギリスと同盟を組めるなどと思ってもいなかったのが日本人も同じであった。伊藤博文ですら、「イギリスが本気で同盟を組んでくれるはずはない」と言って、日英同盟の話を本気にしなかったくらいである。ちなみに、伊藤はロシアと妥協するように、ロシアに行ったほどである。

この日英同盟のきっかけは、1900(明治33)年に起きた北清事変であった。当時の清国は諸外国から好きなように食い荒らされているような状態であった。このような西洋列国に対してシナ人が白人排斥の感情を抱くようになって当然で、その旗頭が「義和団」という宗教集団であった。この「義和団」の乱(北清事変)が起き、瞬く間に清国全体に広がり、とうとう「義和団」は北京を制圧し、同地の公使館区域を包囲するという事態にまでなった。さらに清国正規兵までも攻撃に加わるに及んで、欧米諸国は日本に救援軍を要請するに至った。その時の日本軍のとった行動に英国が注目したのである。

この事件における日本に対する英国の認識、事情については、渡部昇一氏は「昭和史」において次のように語っている。

大英帝国が日本と同盟を結ぶに至ったのは、この北清事変で日本軍が文明国の模範生として行動したことが大きかった。……アジアの小さな有色人種国家にすぎないと思われていた日本がかくも規律正しく、勇敢に動いたこと

がかれらの印象を一変させ「同盟相手として信ずるに足りる国である」という評価をもたらした……日英同盟の場合、イギリスはアジアの植民地を守るためのパートナーとして国益のために日本を選んだわけだが、「日本は信頼できる国である」と言う人達がイギリス政府部内にいてくれなければ、別の相手と組んだであろう<sup>10</sup>。

ところが、その日英同盟の解消を企んだのは、中国とアメリカであった。彼等は日英同盟によって日本の地位が向上し続けていることに不満を持ったのである。当時のアメリカは、中国大陆に進出することを最大の目的にしていた。ハワイ、グアム、フィリピンと西進していったアメリカにとって、最後のフロンティアというべき場所が中国大陆であった。

しかしその中国大陆にはすでにヨーロッパ諸国や日本の植民地があつて、アメリカが割り込む隙はあまりない。そこで彼等は日英同盟を解消させ、日本の力を低下させることでチャンスを作ろうとしたのである。

アメリカは日露戦争における日本の勝利を見て、日本を第一の仮想敵国と見なし「オレンジ計画」なる戦略構想を立案、推進することになった。そして第一次世界大戦の結果としてロシア帝国とドイツ帝国が消えたとき、アメリカの眼には、日英同盟はアメリカに対する砦のごとく映ったのである。

アメリカが精力的に運動した結果、1921（大正10）年のワシントン会議において日英同盟は解消されることになった。その代わりということで日・英・米・仏の四国協定が結ばれたのだが、これが形ばかりのものであるのは言うまでもない。共同責任は無責任という言葉のとおり、この条約は何の意味もなかったし、実際何の役にも立たなかった。

同盟が解消されてからの日本とイギリスはまったくいいことがなかった。イギリスとの同盟がなくなつたと見るや、アメリカは日本を狙い撃ちはじめ日米関係は悪化の一途を辿った。この3年後の1924（大正13）年に、米国議会で「絶対的排日移民法」が成立したのは、その手始めともいふべき出来事であった。

以後日本はどんどん国際社会で孤立していき、第2次世界大戦に突入し、

最後には敗戦国になってしまった。またイギリスも第2次大戦で勝ったのはいいにしても、帝国は解体せしめられ、多くの植民地が独立し、かつての栄光は失われてしまった。

## 8 英国崇拜熱

日本において、英国に関しては、さまざまな研究を初めとして、エッセイなどが戦前から英文学の泰斗福原麟太郎、吉田健一等によって多く書かれている。特に福原麟太郎のエッセイは、単なる英国崇拜のものではなく、大人の円熟した目でじっくりとイギリス人を見て、それを淡々とした筆致で描き、多くの人から信頼されるものになっている。福原麟太郎随想全集の解説において作家庄野潤三は次のように書いている。

第五巻「メリ・イングランド」には、福原さんの中にある英国的な物の考え方、あるいは生き方のいわば基盤となるものが、いったいどんなふうにして育まれ、養われたかを窺う随筆が集められている。それも英国の文化とは何か、イギリス人とは何ぞやといった肩肘張った抽象論はどこにも出て来ない。すべて福原さん流に、ご自分の目にとまった興味あることだけを少しの気負いも誇張もなく何くれとなく書きとめる。私たちはそこに登場する人たち（多くはロンドンの市井の生活者である）に愛すべき隣人を発見し、深い親しみを覚える。そうして、いつの間にかイギリスを身近なものに感じるようになっている<sup>11</sup>。

戦後、米国に関する情報は洪水のごとく、流れ込んできたが、英国に関するエッセイにも面白いものが出てきて、そのはしりは木村治美氏の「黄昏のロンドンから」76年と深田祐介氏の「新西洋事情」77年で、それぞれ大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。

「黄昏のロンドンから」では、英文学者であるが主婦でもある著者の世帯じみた話から、英国病、福祉、教育などいろいろ書いてある。女性特有の鋭い観察をヒューマナーで包んだ文章は心にくいものがあり、英国と日本をたえず公平な目で眺めているが、物を見る原点はつねに日本にあって、思いは必

ず日本に戻っている。

「新西洋事情」では、海外駐在員である著者が、英国、フランス、ドイツなどのまさにビジネスの現場や海外居住者の家庭内に生起する文化の衝突、そしてその衝突から導きだされる西洋体験を興味深く、達者な筆で描いている。

上記の著書はいずれも日本と西洋の国々の特徴を公平に描いていて納得させられるものがある。

その後、日本では英国に対する憧れ、賞賛の声は引き続いて起きていて、英国に関する展覧会、ガーデニングは人気を集めている。

それが次の2冊によって突如として異常な「イギリス・ブーム」が起きてきた。91年の林望氏の『イギリスはおいしい』（平凡社）と次作の『イギリスは愉快だ』（平凡社）である。これらの本は基本的にはいずれも料理に関するものであるが、ただただ牧歌的で美しい英国を描いたもので、まさにイギリス礼賛そのもので、その文章のうまさも加わって、情報過多であるアメリカものに飽きていた日本人の心の琴線に触れたのである。

この本の成功が火付け役となって、さらに「イギリス・ブーム」が起きてしまった。『イギリスは豊かなり』（田村明著、東洋経済新報社）、『イギリスは誘惑する』（宍戸修著、劉草書房）、『愛しのイギリス』（杉山慎策著、日本経済新聞社）などという本が続々と出版されるようになった。

林望氏の英国関係の著作はさらに続き『ホルムヘッドの謎』（文芸春秋）『リンボウ先生、イギリスへ帰る』（文芸春秋）『林望のイギリス観察辞典』（平凡社）が出版される。

さらに『大人の国イギリスと子ども国日本』（草思社）という本が出版されるに及び、「日本礼賛」が「イギリス礼賛の姿を借りた日本批判」といった状況を呈するにいたるのである。この著者マークス寿子氏は英国最大のスーパーマーケット・チェーンであるマークス&スペンサーの三代目当主・マークス男爵と結婚し（その後、協議離婚）、英国籍と男爵夫人の称号を持つことで知られている。

日本の「イギリス・ブーム」に乗り、日本の出版社に歓迎されたマークス



寿子氏は『ゆとりの国イギリスと成金の国日本』、『ひ弱な男とフワフワした女の国日本』(いずれも草思社)と続き、日本批判に拍車がかかるようになる。『イギリスびいき』(講談社)が出版されるに及び「イギリス・ブーム」はその頂点に達した感がある。表紙の腰巻きによれば、「10 人の人気作家・英国通が贈るイギリスを識るベスト・エッセイ集」とある。

10 年ほど続いたこの「イギリス・ブーム」に対して、批判の声が起こって来た。その急先鋒は林信吾氏の『イギリス・シンドローム』—私はいかにして「反・イギリス真理教徒」となったか—である。

林信吾氏はもうとても我慢ならないと、次のように語っている。

林望氏を筆頭に次々と出版される「イギリス礼賛本」を買って読む都度、怒りと憂鬱を同時に感じなければならなかった。ここまでくると、一種のマインド・コントロールなのではないか、と思い始めた。…およそ実態とかけ離れた英国観が、日本の読者人の間に植えつけられていく。……ここはやはり、誰かが「王様はハダカだ」と言っておく必要がある。そういう時が来たと思う<sup>12</sup>。

林信吾氏はその著書の中で、特に林望氏の『イギリスはおいしい』に出てくる多くの間違っている、おかしい例を取り上げているが、その一例として「日本の居酒屋と違って、パブは静かに酒を楽しんでいる清廉潔白なイギリス人しかいない」という点を指摘している。

要するに、このセンセイにとっては、「イギリスは日本より優れている」という命題がまずあって、それを「論証」するためにいろいろと面白いことを書いて下さるのが、常に、はじめに命題ありきで、事実関係はどうでもよいのである<sup>13</sup>。

林信吾氏以外にも同様に、痛烈に「イギリス礼賛本」をやっつけている著作が出た。イギリスの日本人ハウスキーパーとして 72 年以来英国暮らしを体験している高尾慶子氏の『イギリス人はおかしい』(文芸春秋)、『イギリス人はかなしい』(文芸春秋)である。『イギリス人はおかしい』の表紙裏の腰巻

きにある批評の1つには次のように書かれている。

英国を礼賛し、返す刀で日本を斬る、という本が多過ぎるとは思いませんか。かの国のエゲツナイまでの階級性を隠蔽したり、自らを上流階級になぞらえ説教をたれる手合いにはうんざりだ。祇園の元クラブホステスで労働党支持という著者が住み込み体験を元にした出色の英国論。

「朝日新聞」1月25日「読書」欄より

さらに、「高尾慶子『イギリスはおかしい』はおかしい、イギリス信仰に一撃を加えていて痛快、〔サンデー毎日〕中野翠氏評」とある。

今まで論述してきたように、近代日本は確かに様々な面で英国を手本にして学んで来た。しかし、英国の良い面を見てただちに「英国礼賛」に走るのではなく、学ぶべきものは学び、批判すべきものは批判するという態度は極めて大切なものである。

## 9 むすび

日本に初めてやって来た英国人はウィリアム・アダムズ（三浦按針）であった。彼の功績はヨーロッパと日本との間に貿易を開く地固めを行ったことである。しかし徳川幕府の鎖国令によって、英国と日本との絆は約200年にもわたって切れ、外国との接点は、長崎の出島にいるオランダのみとなった。

幕末には攘夷の嵐が吹きまくり、英国、フランス、ロシア等の諸外国との対立は深まった。次第に幕府の力が弱まり、外国の情報が日本に浸透するにつれて、開国が必然の事実となった。一方、長州、薩摩の2太雄藩を中心に討幕の機運が高まった。その間、長州、薩摩の留学生が英国に密航することになる。

明治維新後、日本の改革の手本となるように、1年10ヶ月にわたる「岩倉使節団」という壮大な使節団を、英国を初めとする14ヶ国に派遣する。

憲法は英国でなく、ドイツを模範として、欽定憲法を作成し、新たな日本を出発させる。日清、日露戦争はきわどく勝利したが、日英同盟の果たした役割は大きい。

ビクトリア女王の死去が象徴する大英帝国の転換期に、明治の文学者夏目漱石の留学に、幕末、明治維新直後の留学と違った一個人としての苦悩を見て取れる。

最近の英国崇拜熱は、多少商業ジャーナリズムによって利用された感もあるが、盲目的に崇拜するのではなく、正しい判断力、批判力を持つべきである。

---

#### 注

- 1 オールコック著、山口光朔訳『大君の都』(下)(岩波書店、1962) p.325.
- 2 久米邦武編『米欧回覧実記』(二)(岩波書店、1978)、p.21～22.
- 3 前掲書2、p.381.
- 4 前掲書2、p.384～385.
- 5 Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan (SEELEY SERVICE & CO. LIMITED, 1921) p.25.
- 6 今井宏著、『日本人とイギリス』(ちくま新書、1994)、p.137.
- 7 夏目漱石著、夏目漱石全集14巻『文学論』(序論)(岩波書店、1995)、p.3～4.
- 8 前掲書12、p.12～13.
- 9 夏目漱石著、『現代文学大系』〔夏目漱石(一)(私の個人主義)〕(筑摩書房、1964)、p.482.
- 10 渡部昇一著、『昭和史』(ワーク株式会社、2003)、p.124.
- 11 福原麟太郎著、『福原麟太郎随想全集』5 メリ・イングランド(解説 庄野潤三)、(福武書店、1982)、p.297.
- 12 林 信吾著、『イギリス・シンδροーム』(KK ベストセラーズ、1998)、p.15～16.
- 13 前掲書12、p.24.

## Summary

### The History of the Relation between Japan and the United Kingdom

Tetsuya Kobayashi

I have tried to trace the Relation between Japan and the United Kingdom historically.

The Englishman who came to Japan for the first time was William Adams called Anjin Miura. His achievement was to have solidified the foundation to open trade between Japan and U.K. But the bonds between Japan and U.K. had been broken for about 200 years by the national isolation policy of the Tokugawa government, and the point of contact between Japan and foreign countries was only at Dejima in Nagasaki.

At the last days of the Tokugawa government, the storm of the exclusion of foreigners raged, and the opposition between Japan and foreign countries, U.K., France, and Russia deepened. As the power of the Tokugawa government weakened gradually, and many informations from abroad penetrated through Japan, the opening of Japanese country became inevitable. The two great feudal clans, Choshu and Satsuma showed a strong tendency to overthrow the Shogunate, while some Samurais of the two clans went to U.K. secretly to study there.

After the Meiji Restoration, the government sent a great mission called “Iwakura Mission” to 14 countries to learn various things for one year and ten months.

A lot of foreigners especially Englishmen were hired in various fields.

Japan narrowly won the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War, and then the Anglo-Japanese Treaty fairly contributed to Japan’s victory.

Soseki Natsume studying in U.K. showed his distress different from the Samurais at the last days of the Tokugawa government and after the Meiji Restoration.

The U.K. fever of recently seems to have been caused somewhat by commercial journalism. We should have a right view of the United Kingdom.